外務省による招聘で来日したオランダ人戦争被害者との対話集会の記録

2022 年 11 月 29 日　会場：中央大学多摩キャンパス　グローバル館

【オランダ側参加者】

イナ・シャーロッテ・エンシング＝ブレスラウ
Ina Charlotte Ensing=Breslau

アニータ・ルイス・ミデルブルフ＝ビーハー
Anita Louise Middelburg-Bieger

司会：今日の集会には、インドネシアにおける戦争中のオランダ人抑留に関心のある学生グループを中心に、多くの学生が参加している。1945 年に終わった戦争の記憶はしだいに忘れられようとしている。現代の社会では植民地主義は重要な問題ではない。しかし 1942 年から 45 年まで、現在のインドネシアに当たるジャワ、スマトラ、カリマンタン（ボルネオ）は日本軍によって占領された。当時の日本は天皇制と軍国主義で大変な時代だった。

日本占領下のインドネシアでは、アンバラワ、スマラン、チマヒなどの収容所にオランダ民間人を分けて収容した。それらの収容所はひどい環境だった。飢えが広がり病気も流行った。学生達は本を読んだりして、抑留の歴史を学んでいる。抑留、独立運動、帰国、また植民地政策とその終焉も。

現在ウクライナで戦争が起こり、学生たちも戦闘や飢えた子どもたちを映像で見るにつけ、戦争に関心を持つようになった。今若い人たちが過去を知ろうとしている。戦争の事実を聞きたいと思っている。まずゲストの方々から子供時代の経験を中心にお話を伺いましょう。

イナ：若い人がこんなに大勢来てくれて嬉しい。75 年前の第 2 次世界大戦で、オランダはドイツに占領された。その頃多くのオランダ人がオランダ領東インド（蘭印）に住んでいた。まだインドネシアという名前の国も無かった時代だ。蘭印は日本軍に占領され、オランダ人はそれから 3 年半もの間捕虜や抑留者となった。その頃私たちはとても若かった。

この日本への旅はとても大事な意味を持つと思う。平和のために交流するこのような集まりはとても大事だ。私は今美しい日本を見て、驚いている。昔知っていた日本とはすべて変わった。私とアニータはそれが嬉しい。

アニータ：九州の水巻町で十字架の塔を訪れ、日本で亡くなった 800 余名のオランダ人捕虜の為、献花した。その後、長崎で平和公園に行き、原爆のことを学んだ。長崎にはほかにも慰霊碑があって、オランダのロイヤルファミリーが訪れたこともある。未来を作る世代である大学生が、戦争のことを学ぶのは大事だ。長崎はオランダに姉妹都市を持っている。日蘭の交流は意味が深い。日本人は抑留所に収容された（オランダの）子どもたちのことを全く知らないのだから。私たち元抑留者は

日本人を嫌って、日本車もカメラも日本製品は絶対に買わない人もいる。私も原爆に感謝していた。それは、原爆が戦争を終わらせてくれたからだ。しかし長崎で原爆資料館に行ってみて、連合軍がしたことも日本の人々にとって酷いことだったと知った。だから皆さんから自分たちと異なる意見を聞きたい。

司会：今日はオランダ人の留学生も参加しているので、何か言ってもらいましょう。

男子と女子の学生が 1 人ずつ立つ。

アニータ：オランダのどこから来たの？

オランダ男子：ハーレンです。アムステルダムの近くです。

アニータ：いい所ね。運河もある古い町だわ。

オランダ女子：ブレダです。アムステルダムからは遠いです。私は英語が上手でないので・・・（オランダ語のやりとり）

司会：オランダでは前の戦争のことをどう教えられているのか？

アニータ：学校で教えるのはドイツとオランダとの戦争が中心になっている。戦争でオランダはドイツに占領されたのだから。今でもオランダ人は典型的なドイツ人を見ると緊張する。

オランダ男子：ドイツも変わった。互いの国で交換留学をするなど、交流が始まっている。若い世代でも、ドイツとオランダのサッカーの試合には熱くなる。一方インドネシアの独立は、歴史を学ぶ中ではマイナーな部分だが、重要だと思う。

イナ：私たちの親世代は、戦後（インドネシアから）オランダに帰ってきた時に、「あなた方は食べ物が豊富な暖かい国にいてよかったわね。自分たちは独軍からの空襲でひどい目に遭った」と言われた。日本に占領され、抑留された苦しみは分かってもらえなかった。親たちは口をつぐみ、やっと話すようになるまで 50 年かかった。それでもまだ話せない人は沢山いる。

戦争中をオランダで過ごした世代はドイツ人を怖がるが、自分たち抑留者にとっては怖い日本人という思いしかない。しかしオランダではそれが語られることは全く無かった。1942 年はすごく昔のことだけれど、今とは全く異なる世界だった。それを知ってもらうこの集会は重要だと思う。

アニータ：インドネシア人はオランダ人のことを好まなかった。それは、オランダ人が彼らを奴隷のようにしていたからだった。戦後は独立を求めるインドネシア人による暴動が起こって、私たちは危険にさらされた。多くのオランダ人は危険を避けてオーストラリアへ行った。私の家族もそうだった。中には日本兵による武力でインドネシア人の暴徒から守ってもらった収容所もあった。私はその頃 5 歳ぐらいだった。父と母や私たち子どもはオーストラリアで落ち合い、最終的にはオランダに帰った。私は父のことをすっかり忘れてしまい、オーストラリアで再会したとき、知らない人だと思い、「初めまして」と父に言ったのを覚えている。さて家族で帰国したが、私にとっては初めてのオランダで、遠くて寒かった。今回の旅で、日本がとても綺麗な国、そして日本人が皆親切なので驚いている。

イナ：戦争は悪いことだ。今戦争が起こってしまったウクライナの人達が、国を離れてたくさんオランダに来ている。オランダは小さな国だが、できるだけ受け入れている。ロシアはたくさん原爆を持っている。もし 1 発でも原爆が落とされたら、その時にオランダは終わると思う。

司会：参加者から質問や感想があったらお願いします。

田村：イナさん、アニータさん、日本に来てくださりありがとう。ここに来るまでに色々葛藤があったと思いますが、日本への旅を決断した理由は何ですか？

イナ：私は日本に興味があった。たまたまアニータと、住む町ハーグが一緒だったので、心強かった。

アニータ：私は子どもと母親の収容所に入れられた。若い男の子の収容所はそれとは別にあって、男の子は 14 歳になると母親と引き離された。戦争が終わってからインドネシアの独立があり、私たちはオランダに帰った。そうするしかなかった。オランダは小さい国で、蘭印からは遠くてそこの人々は私たちのことを理解しなかった。オランダと日本には古くから関係があって、17 世紀日本に将軍がいたころ、オランダ人は日本に来たのよ。

この旅にはあと 3 人の男性が参加する予定だったけれど、彼らはとても神経質で、1 人体調が悪いから行かないと言ったら、みんな出かけるのをやめてしまった。私たち女性は強いから来たけど。

イナ：ラッキーだったと思う。とても良い人たちに面倒をみてもらって、初めは緊張したけれど、今は親しくなれた。

田村：あなた方のお父さんは戦争中はどこにいましたか？男性たちの中には日本軍に捕らえられて、タイとビルマの間をつなぐ鉄道の工事で働かされた人もいましたが。

イナ：父のこと？父は男性だけの収容所にいたわ。とても辛い経験をしたらしい。父とはオーストラリアで落ち合ったわ。多くの人が同じような経験をした。14 歳以上の男の子は、母親から引き離されて男の子だけの収容所に入れられたの。ひどい環境だったらしい。

アニータ：若い学生の皆さんは、祖父母などの戦争体験をどう聞いているか？

男子学生 A：祖母から聞いた話だが、米軍に爆撃されたときは地面に掘った穴に逃げ込んだという。それから祖父の兄弟は戦艦大和に乗っていた。多分死んだ？らしい。

イナ：私は長崎に行って、原爆がどんなに酷いものだったかイメージできた。原爆の放射能が残って、何年も後に人体に害を与えたり、次の世代にまで害があったというのは酷いことだと思う。しかもそれをあまり語ることもできなかったという。

女子学生 A（涙声）：来てくれて、このような機会をあたえてくれてありがとう。私は広島の原爆のことは学んでいたが、今回はじめて戦争で日本のために酷い目にあったオランダ人の話を聞いて、…申し訳なく思って…。

アニータ：ゆっくりでいいわよ。

イナ：　大丈夫よ。落ち着いてから話してくれて良いのよ。

女子学生 A：戦争の歴史を保存して次の世代に渡すのは難しいけれど、映像など新しいテクノロジーを使って、戦争の話を伝えるイニシアティブをとりたい。

アニータ：4 年間の収容所生活の中で何があったか、母に聞くこともできず、母は絶対に話してくれなか

イナ　　アニータ

った。私は黙るしか無かった。戦争のことは話してはいけなかった。多くの人がそうだったと思う。私たちは何があったか、その記憶をもっと多くを若い人に話したいが、2 歳とか 3 歳で収容所生活した人は覚えていない。もう少し年が上の人達は良く記憶しているので、私達は沢山話を聞いた。もっと年上の人はもう忘れてしまっている。

イナ：今、私たちは友だちになったのだから、平和を作りましょう。

女子学生 A：若者の代表として、経験を伝えていきたい。

女子学生 B：私は国際法を学んでいる。祖母は広島で原爆にあって、多くの人が死に、その死体の上を歩いて逃げなくてはならなかったのが辛かったと話してくれた。

アニータ：原爆は酷いものだったと思う。知ることは戦争を止めるための第 1 歩だ。

女子学生 B：若い世代はどうすれば社会を変えられると思うか？

アニータ：もっと日本の若い世代にオランダに来てほしい。オランダと日本は長年の交流があったが、今は止まっているようだ。

女子学生 C：広島の原爆を、今はどう思っているか？

イナ：日本は美しい国よ。日本人が戦後努力してこういう国を作ったのだと思う。皆さんは美しい日本を楽しんでください。

アニータ：私たちは日本を知るというミッション（使命）をもってこの旅に参加した。実際日本への見方は原爆も含めてすっかり変わった。それまでは日本を敵だと思って恐れていた。でも 3 人の男性（一緒に来る予定だった）は、今もまだ怖がって来なかった。感情的になりすぎている。来年にするとか言っていたが、年だから死ぬかもしれないのに。今すぐ出てきて話を聞くべきだ。

司会：ここで休憩時間をとります。コーヒーやお茶を用意したので、どうぞ飲んでください。

（休憩 10 分間）

司会：再開します。あなた方学生から、自由に意見を言ってください。

男子学生 A：このような機会をありがとう。日本の戦争に対するアティテュード（attitude/態度）をどう見ていますか？

司会：それは難しい質問だと思う。

アニータ：80 年前のことを忘れずにいるのは大変。それでも毎年戦没者慰霊碑に花を供えているのでし

ょう？8 月 15 日はオランダではどこでも戦勝を祝い、戦没者に花を捧げる。5 月 4 日はドイツ降伏の日だから祈念式典が毎年ある。近年はインドネシアにおける日本による戦争被害者と、オランダ本国のドイツによる戦争被害者のことを、一緒に追悼できるようになってきた。でも若い人達の中にはいつまでそんな昔の追悼をやっているの？と言う人もいます。

イナ：長崎では大きな平和祈念像があって感動した。オランダにも色々な像があるが、とてもストレートに戦争を表すものが多い。それに対し長崎の像は美しい。色々な像を見て戦争を具体的に理解することも大切だ。平和を心から望みます。

男子学生Ｂ：僕の祖父母の家には曽祖父が軍服を着た写真があって、それについて祖父に聞いたけれど説明してくれなかった。戦争のことをしゃべりたくない人がいて、そのためこれから益々戦争のことが伝わらなくなる。どうしたら戦争を次の世代に語り継いでいけるか。

アニータ：もっと話すよう何度も頼みなさい。日本への憎しみや酷い体験の思い出は私の頭の中にもある。私がそれを孫に話すかというと、それは簡単ではない。私が収容所で体験したことを語っても、人々は「信じられない」という反応だった。あなたの祖父母はあまり話してくれないようだが、いろいろな方法で何度も頼み、話してもらうことが大切。

男子学生Ｂ：優しい祖父を怒らせたくない気持ちがあったが、それでも頼んで話してもらうべきだということが分かりました。

アニータ：あなたの祖父はまだ生きているのだから、何度も試みて、話してもらうといい。私ももっと父が生きているうちに、話してもらえばよかったと後悔している。

男子学生Ｃ：今日話してくれてありがとう。来日してみて日本の印象はどう変わりましたか？

イナ：オランダでは日本の習慣のことはあまり知られていない。日本ではオランダのようにハグするのではなく、おじぎなどで互いの尊敬を示す。今回の訪問でようやくその意味がわかった。日本の習慣は敬意に満ちている。何と美しい、と思いました。オランダ人は日本人より無作法に思えてきた。抑留所でのお辞儀の意味は違った。毎朝、一列に並ばされ、(皇居に)向かってお辞儀をさせられた。日本兵何人かが木刀を持ってお辞儀の仕方を見張っていた。お辞儀のやり方に慣れない母達は、お辞儀が浅いとよく頬を殴られた。私達子供は、時には母達が木刀でたたかれるのさえ、そばで見ていた。今もその光景を忘れることは無い。

アニータ：お互いに尊敬し合うことはいいことだ。オランダでは、子どもにはおじぎをする習慣はない。

男子学生Ｄ：日本の食べ物や文化についてどう思いますか？

アニータ：日本の食べ物や美術品はオランダでとても人気がある。一方ドイツは全然人気がない。日本は戦争では敵国の代表だったのにね。3 か月ぐらい前とても美しい日本庭園がオランダでオープンしたのよ。鳥が卵を産み、温めているから、としばらく閉園したの。とても特別でしょ。

男子学生Ｄ：日本の文化や自然を褒めてもらったけど、オランダのことを私はあまり知らない。アムステルダムに運河があるぐらいかな。

アニータ：オランダは昔植民地のおかげですごく豊かだったのよ。おいしいコーヒーショップも多くて。運河がたくさんあって、船で運河をめぐる多くのコースも有る。

イナ：小さな国だけど、アムステルダム、ハーグ、ロッテルダム、ブレダとそれぞれ個性のある街があって、ぜんぜん違うのよ。

女子学生Ｄ：私の祖母は台湾人です。私は彼女から話を聞きました。台湾は昔日本の植民地でした。

司会：若い世代がこれから世界と交流していくために、何が必要だと思いますか？

イナ：英語はとても大事です。よく学び、もっと話しなさい。あなた方の英語は上手です。英語は世界で最も広く使われ、学ぶのに難しくない言葉よ。

男子学生Ｅ：祖父の話を聞きました。私は法律学を学んでいます。日本には世界に有名な憲法があって、その第９条では戦争をしない、軍隊を持たないと定めています。自衛隊はありますが、自衛のための武力です。あなたは、どんな法律があったほうがいいと思いますか？

司会：今日本では、自衛力ではない軍隊を持つべきかどうかの議論がある。あなたの質問は、戦争を無くすための法についてだと思う。

アニータ：ドイツも日本も第２次世界大戦の敗戦国で、戦争はしないように決めている。しかし日本には米軍がいるのではないか？オランダにも米軍基地はあるが、今はどんどん撤退し、数は減少している。あなたたちも基地を無くすように働きかけたら？

司会：米国の軍事基地が日本にはたくさんあり、日本はセキュリティーを米軍に任せている。

男子学生Ｆ：今戦争を直接体験した人が減ってきている。また再軍備を主張する政治家もいる。自分はまだ十分な知識が無く、それについて反対とか言えないが、戦争のことを学ぶことから始めたい。

司会：若い世代は日本の歴史の特徴を知って、戦争をしたくない気持ちがあると思う。それはとても興味深いことだ。日米の関係は非常に深く難しい問題だ。

アニータ：ロシアが攻めてくるかもしれないという現在、オランダの立場も難しいと思う。

外国人教授：学生と一緒にお話を聞くことができて光栄です。まず学生たちに言いたい。君たちの英語は素晴らしい。これまで学生達はテストの為に英語を勉強してきたと思うが、これからはコミュニケイションとしての英語を学んで欲しい。世界との交流のために有効だと思う。

ところで私の父はアメリカ人で、前の戦争ではフィリピンにいて前線で日本軍と激しく戦ったらしい。父も、戦争についてはほとんど話さない。その息子である私は日本で暮らし、私の妻は日本人だ。子どもたちはジャパニーズアメリカンで、だからもう私は、アメリカとも日本とも戦争はできない。その上私の息子のガールフレンドは韓国人だ。こうして色々な国籍や人種の人が結婚して、たくさんのミックスの子どもが生まれることが平和の基となり、戦争が無くなるではないかと思うことがあるが、あまり公に言うことではない。君たち学生は、もっと世界に出ていって、国際理解を深めていってほしい。

司会：今日はどうもありがとうございました。

（記録：田村佳子、小宮まゆみ）

学生からプレゼントをもらうイナ（左）とアニータ